企画・制作 神奈川新聞社クロスメディア営業局

ヨコハマと共に歩んで

勝烈庵、三沢電機創業90周年記念座談会

関東大震災の復興から戦災を経て今日に至るまで、国際都市・横浜の成長を見つめ、共に歩み続ける二つの企業がある。文明開化の心を守り続ける和風カツレツの「勝烈庵」（横浜市中区）、時代と共に快適な暮らしの実現に寄与してきた「三沢電機」（同西区）。共に1927（昭和2）年の創業、今年90周年を迎える両社は、まさに「ハマの歴史の生き証人」でもある。勝烈庵の本多初穂社長、三沢電機の三澤隆社長と、横浜開港資料館の西川武臣副館長に参加いただき、その足跡を横浜発展の背景と共に振り返ってみた。

（文中敬称略）

出席者：本多初穂 株式会社勝烈庵代表取締役社長／三澤隆 三沢電機株式会社代表取締役／西川武臣 横浜開港資料館副館長
コーディネーター：神奈川新聞社経営企画室長兼社長室長 有吉敏

昭和10年代の伊勢佐木町通り（横浜開港資料館蔵）

震災復興の息吹の中で

―勝烈庵、三沢電機が創業した1927（昭和2）年、横浜はどのような状況だったのでしょうか。

西川　当時、横浜は1923（大正12）年に起きた関東大震災からの復興に全力を傾けていました。有吉市政の下、震災前の横浜に戻すだけでなく「新たな横浜をつくる」という気運にあふれ、鶴見から川崎にかけて工業地帯をつくる、港の機能を飛躍的に高める、さらに市域の拡張という3大事業にまちを挙げて取り組んでいました。1927（昭和2）は、まさにそれらの事業が軌道に乗り始めた時代です。

この年に関するこんなデータが残っています。当時の「神奈川県統計書」によると、豚の生産頭数は関東大震災が起きた年は3万頭弱、それが5万2千頭と急激に消費が伸び、同じく電気事業も、東京電燈という会社の電気供給が15万戸に対し20万戸を超えています。

本多　創業者の小澤竹蔵は祖母の遠縁に当たります。当時、慶應大学を出て石油の元売り会社に就職しヨーロッパに赴任、外交官を務めたこともあるそうです。日本に戻ってからは、さまざまな仕事に挑戦しては失敗の繰り返しだったといいます。そんなとき、たまたま東京でとんかつを食べ「なんてうまいんだ」と感動することになりました。

本多　勝烈庵の再出発は、横浜駅西口の横浜名品街から始まりました。戦争で全てを失い、創業者が手を引いてしまったので、私の祖母が「勝烈庵」の商標も含めて一切を譲り受けました。祖母は小さいときから長唄や三味線を習い、新橋で芸者をしたり、喫茶店の経営などもしていたようです。どの商売でも繁盛させる才覚があり、創業者の信頼も大きかったようです。

―時代と共に価値観やニーズが多様化する中、何か変化はありましたか。

本多　ニーズに対応したかというと、答えはNOです。創業以来、ずっと変わることなく、伝統を守り続けています。訪れるお客さまも勝烈庵のそこを気に入っていただいているのではないでしょうか。店を譲渡するとき、創業者が祖母に示した条件もその一点だけでした。

当時ヒレカツは四角、エビフライは丸いお皿。メニューは極めて限られている。ごはんは、頑固にガスで炊き、おひつで保存し、お米本来のおいしさを追究する―。大切に継承している、私たちの心のようなものです。

三澤　弊社には「常にお客さまの身になって仕事をする。お客さまを第一に考える」という家訓があります。それは、どんな時代になっても変わることはないでしょう。

建物の電気・空調・給排水設備というのは、人間でいえばいわば心臓であり、血管です。止まったらお客さまの仕事が機能しなくなってしまいます。この時間をいかに少なくするかが私たちにとっての勝負、これからも切磋琢磨し、真摯に取り組んでいきたいですね。

―横浜は震災・戦災の災禍をくぐりぬけたまちで、二つの災害によって多くのものを失いました。今後も、このまちが育てあげた伝統を守りつつ、安全で住みよい魅力あるまちになっていくことを願っています。

本多　どんなにグローバル化が進んでも、創業以来の勝烈庵の姿勢は変わることはありません。お客さまもこれまでと同じ接客を求めていると思うのです。

「勝烈庵」の店名書体は棟方志功画伯の手によるものです。先々代の当主が、棟方画伯の作品に感銘を受け、交流を深めてきたのです。

店内に飾られた棟方画伯の板画や肉筆画は、味はもちろん、常に本物と触れ合っていただきたいという思いの表れです。カツレツをご賞味いただきながら、ぜひご鑑賞いただければと思います。

三澤　私たちは、お客さまの快適な生活をどうやって守っていくかを常に考え続けなければなりません。それは時代の推移とはあまり関係ありません。

それを支えるのは、優れた技術力にほかありません。お客さま一人一人と向き合い、それにあった技術力を身に付けしっかりと継承していく―。それがここ横浜の発展に対してできるお手伝いであり、弊社でしかできないことだと自負しています。

常にお客さまの
快適な暮らしを求めて

三沢電機株式会社
代表取締役

三澤　隆さん

みさわ・たかし
「技術と堅実、満足して戴ける品質を提供する」ことを経営理念に掲げている。趣味はゴルフとマリンスポーツ。

伝統の味を
守り続けたい

株式会社勝烈庵
代表取締役社長

本多 初穂さん

ほんだ・はつほ
横浜を愛し、食を通じて地域文化に貢献できればと思います。移動の電車の中での読書、特に時代小説を読むのが気分転換です。

頑固に伝統を守りたい

1956年当時の横浜駅西口（神奈川新聞アーカイブズ）

まちの文化として定着

―両社の創業から終戦までのおよそ20年間はどんな時代だったのでしょうか。

西川　1935（昭和10）年に山下公園で復興大博覧会が催されるなど、ある程度復興のめどが立った時期ではありました。

一方で、日本が戦争に向かって歩み始める時代でもあり、社会全体の景気は次第に後退していきました。ただ、食にしても、電気事業にしても暮らしに欠かせないものです。戦火が激しくなるまで、低迷する横浜の経済を支えていくことになります。

―カツレツはどのように市民の暮らしに定着したのでしょうか。

本多　勝烈庵のカツレツは、外国人コックが居留地にもたらしたカツレツを、創業者が工夫を重ね独特の和風カツレツとして完成させたものです。厳選した豚肉、特製の生パン粉、揚げる油の配分、全てにこだわりがあります。ソースも当時は市販のものはありません。創業者がヨーロッパでの経験から、野菜と果物をじっくりと丁寧に2日間煮込み、1日寝かせて完成する秘伝のもの。伝統の味へのこだわりは、創業以来今日に至るまでかたくなに守り続けています。

創業当時は今日とは異なり、カツレツはちょっと高級な食べ物。きっと、たまの休日に家族そろってまちに出掛け、「ちょっと贅沢しようか」、という感じで受け入れられていったのではないでしょうか。

―この時期、三沢電機はどのような取り組みをしていたのでしょうか。

三澤　戦時中の電気技師は非常に重宝され、大手工場や電力会社の指定店として出入りをさせてもらっていたようですが、横浜大空襲で私たちが住んでいた一帯は壊滅的な打撃をうけ、生きているのが奇跡のような状況でした。「せっかく生き残った命なのだから、電気の技術を復興のために何か手伝えないか」と、修理販売にとどまらず建設工事も請け負うようになり、集まってきた仲間たちと電気工事業を再開することになりました。

本多　勝烈庵の再出発は、横浜駅西口の横浜名品街から始まりました。戦争で全てを失い、創業者が手を引いてしまったので、私の祖母が「勝烈庵」の商標も含めて一切を譲り受けました。祖母は小さいときから長唄や三味線を習い、新橋で芸者をしたり、喫茶店の経営などもしていたようです。どの商売でも繁盛させる才覚があり、創業者の信頼も大きかったようです。

国際性と歴史を
合わせ持つまち

横浜開港資料館
副館長

西川 武臣さん

にしかわ・たけおみ　1981（昭和56）年の横浜開港資料館の設立時から同館に勤務。史学博士。横浜が貿易港としてもっとも繁栄していた幕末から明治時代の横浜の歴史を明らかにする仕事に携わっている。

国際都市横浜を生きる

―横浜は国際都市として進化を続けています。その可能性や期待について、どのようにお考えですか。

西川　今回、お話をうかがった両社は、昭和初年に当時としては新しいものを暮らしに取り入れるという「先取の精神」を発揮した会社でした。「先取の精神」は西洋文化移入の窓口として発展した横浜の伝統ですが、今後もこうした「横浜らしさ」をアピールするまちであって欲しいですね。

横浜は震災・戦災の災禍をくぐりぬけたまちで、二つの災害によって多くのものを失いました。今後も、このまちが育てあげた伝統を守りつつ、安全で住みよい魅力あるまちになっていくことを願っています。

本多　どんなにグローバル化が進んでも、創業以来の勝烈庵の姿勢は変わることはありません。お客さまもこれまでと同じ接客を求めていると思うのです。

「勝烈庵」の店名書体は棟方志功画伯の手によるものです。先々代の当主が、棟方画伯の作品に感銘を受け、交流を深めてきたのです。

店内に飾られた棟方画伯の板画や肉筆画は、味はもちろん、常に本物と触れ合っていただきたいという思いの表れです。カツレツをご賞味いただきながら、ぜひご鑑賞いただければと思います。

三澤　私たちは、お客さまの快適な生活をどうやって守っていくかを常に考え続けなければなりません。それは時代の推移とはあまり関係ありません。

それを支えるのは、優れた技術力にほかありません。お客さま一人一人と向き合い、それにあった技術力を身に付けしっかりと継承していく―。それがここ横浜の発展に対してできるお手伝いであり、弊社でしかできないことだと自負しています。

発展を続ける横浜

勝烈庵、三沢電機の歩みと横浜市の主な出来事

1923（大正12）年	関東大震災発生
1927（昭和 2）年	三澤義夫「三澤電機商会」を創業 勝烈庵創業
1928（昭和 3）年	市営バス開業（7路線・30.2km）
1930（昭和 5）年	山下公園開園
1935（昭和10）年	復興記念横浜大博覧会開催
1936（昭和11）年	勝烈庵 伊勢佐木町支店開店
1939（昭和14）年	勝烈庵 川崎支店開店（1944年閉店）
1941（昭和16）年	12月 日本が太平洋戦争に突入
1944（昭和19）年	勝烈庵 強制疎開により閉店。
1945（昭和20）年	5月 横浜大空襲 三沢電機 戦災により工場焼失し休業 勝烈庵 伊勢佐木町支店空襲により消滅 8月 日本が降伏する
1946（昭和21）年	11月 日本国憲法公布。翌年5月3日施行 三沢電機 営業再開（藤棚町）
1950（昭和25）年	三沢電機「三沢電機株式会社」に組織変更
1956（昭和31）年	政令指定都市となる 勝烈庵 再興（横浜駅西口名品街） 勝烈庵 馬車道総本店開店
1957（昭和32）年	有限会社勝烈庵設立
1958（昭和33）年	開港100年記念祭開催
1959（昭和34）年	現在の市庁舎が落成
1960（昭和35）年	三沢電機 冷暖房部（後の空調工事部）発足
1961（昭和36）年	マリンタワー開業 勝烈庵 横浜高島屋8階お好み食堂に出店（2002年閉店）
1962（昭和37）年	港の見える丘公園・横浜文化体育館が完成
1964（昭和39）年	東海道新幹線開通 勝烈庵 ダイヤモンド地下街店開店（2014年閉店）
1965（昭和40）年	三沢電機 本社を戸部町に移転、社章を作成
1966（昭和41）年	三沢電機 東京支店開設
1968（昭和43）年	三沢電機 三澤義夫社長、黄授褒章受賞
1973（昭和48）年	根岸線全線開通 勝烈庵 横浜駅西口名品街店が相鉄ジョイナスに
1974（昭和49）年	有限会社勝烈庵を株式会社に組織変更
1978（昭和53）年	大通り公園、横浜スタジアム完成
1982（昭和57）年	「国連アジア太平洋都市会議」開催
1983（昭和58）年	みなとみらい21事業始まる
1985（昭和60）年	「日本丸」が公開される 三沢電機 三澤漸が社長に就任
1986（昭和61）年	横浜人形の家、関内ホールオープン 三沢電機 厚木支店開設
1989（平成元）年	市政100周年・開港130周年記念式典 横浜博覧会開催 金沢シーサイドライン開通 横浜ベイブリッジ開通 三沢電機 三澤漸社長、黄授褒章受賞
1994（平成 6）年	三沢電機 花咲ビル（営業所）完成
1996（平成 8）年	勝烈庵 スカイビル店開店
1998（平成10）年	横浜国際総合競技場オープン
1999（平成11）年	市営地下鉄（戸塚―湘南台間）開通
2002（平成14）年	赤レンガ倉庫オープン サッカーワールドカップ日韓大会決勝戦などが横浜国際総合競技場で開催 横浜港大さん橋国際客船ターミナルリニューアルオープン
2003（平成15）年	三沢電機 ISO9001認証登録
2004（平成16）年	みなとみらい線開業
2007（平成19）年	勝烈庵 ふらいあんスカイビル店オープン（2009年閉店）
2008（平成20）年	市営地下鉄グリーンライン（中山―日吉間）開通 三沢電機 リニューアルサービス部発足
2009（平成21）年	開国博Y150開催
2010（平成22）年	「APEC（アジア太平洋経済協力）首脳会議」開催 三沢電機 三澤隆が社長に就任
2012（平成24）年	勝烈庵 本多初穂が社長に就任
2013（平成25）年	「第5回アフリカ開発会議」開催
2014（平成26）年	勝烈庵 鶴屋町店開店
2017（平成29）年	近代水道創設130周年 三沢電機 創業90周年 勝烈庵 創業90周年

企業プロフィール

株式会社勝烈庵

文明開化の地・横浜で、創業時より変わらぬ味を貫いている老舗カツレツ店。初代庵主が作りだした独自の和風カツレツの味にこだわり歴史を刻んでいる。世界的板画家、棟方志功もその味に魅了された。現在、馬車道総本店を含め県内に4店舗。毎年10月の「かつれつ祭り」では、棟方氏の作品が描かれた絵皿が来店者に進呈される。
横浜市中区常盤町5-58-2　TEL045（211）1551（代表）

三沢電機株式会社

オンリーワン企業を目指して、創業以来、社是である「技術と堅実」を継承し、信頼と実績を培ってきた。県内でも歴史ある総合設備企業として、商業施設、教育施設、福祉・医療施設、公共・交通施設等での電気・空調・給排水設備事業を展開。最新技術の習得、そして実践を通して、常に顧客満足を最優先に事業推進している。
横浜市西区戸部町4-158
TEL045（241）1621（大代表）

「馬車道十番館」で行われた座談会。横浜への思い、受け継ぐ伝統への思いを熱く語りあった